

巻頭の言葉



鶴岡市立荘内病院 院長
鈴木 聡

鶴岡市立荘内病院医学雑誌第36巻の刊行にあたり、ご挨拶申し上げます。

令和7年の「今年の漢字」は、「熊（クマ）」が選ばれました。季節にかかわらず全国各地で熊の出没と深刻な被害状況を受けたものと思われまます。当院でも熊による被害者が救急搬送されましたが、幸い命に別状はありませんでした。当院は令和7年度に「クマ出没対応マニュアル」を作成するとともに、クマ外傷者が搬送された際の対応についての研修会を行うなど、救急体制を強化しています。

一方政治面では、高市早苗氏が令和7年10月に第104代内閣総理大臣に選出され、憲政史上初の女性首相が誕生した年でもあります。高市内閣には医療・介護・福祉など社会保障関連分野を含めて、力強い経済改革が推進されることを期待します。

そのような社会情勢の中、当院の令和7年度の経営状態を見ますと、物価の高騰や人件費の上昇に対し、診療報酬制度が十分に機能しない構造的な問題等により、様々な経営改革を行っているにもかかわらず、全国の多くの病院同様深刻な赤字状態に陥っています。令和8年度の診療報酬改定では、久々に3%以上の大幅プラス改定が報じられていることは誠に喜ばしいことですが、大幅な赤字を解消するには不十分です。この難局を乗り越えるため引き続き職員の皆様には、病院経営改革へのご理解とご協力をお願いします。

さて、令和7年に当院が関係する主なイベントを振り返ってみます。まずは、10月26日(日)に開催された「荘内病院まつり～まごころフェス～」、メインテーマが「感動体験」。開院112年目で初めての病院まつりには約1800名の来場者が職業体験コーナーやステージ発表などを楽しまれ大変好評でした。二つ目が、11月23日(日)に開催された「J2モンテディオ山形パブリックビューイング (PV) in 荘内病院」。患者さんやご家族、当院職員へスポーツ観戦を通じて笑顔と活気を届けられるようにと、当院職員有志とモンテディオ山形スタッフが協力して県内医療機関で初めて開催したものです。PVでの応援を通して、患者さんを含め参加者の一体感が生まれた良い取り組みでした。そして3つ目が、第52回日本小児東洋医学会学術集会在、会頭の八木実先生（鶴岡市病院事業管理者/久留米大学名誉教授）主宰で、11月2日(日)鶴岡市の東京第一ホテル鶴岡で開催されたことです。県内外から多くの関係者が参加し、会場内での研究発表や討論はもちろん、エクスカッションとしてクラゲで有名な加茂水族館のバックヤード巡りや出羽三山神社関連イベントへの参加など、鶴岡の魅力の一端を楽しんでいただきました。

そのような状況の中荘内病院医学雑誌第36巻は、＜特集＞として「地域から始まる看護の未来—荘内看護専門学校と当院の連携で生まれる次世代の育成—」を取り上げています。75年の歴史を誇る荘内看護専門学校は、待望の新校舎が当院のより近くに建設され令和7年4月に開校しました。それを記念した＜特集＞では、3名の方に執筆いただきました。一人目は、学校長でもある私鈴木が、荘内看護専門学校の75年を振り返りながら、今後の課題として看護職を目指す若者に選ばれる学校になるための方策について考察しました。続いて五十嵐慶副校長は、新校舎に込めた願いとこれからの歩みに言及しています。すなわち、看護学校と実習施設（荘内病院）が極めて近くにあること。看護学校では約90人に及ぶ当院職員による講義が行われ、110名以上の当院臨地実習指導者による指導が行われるなど、講師不足や実習施設の確保に難渋している看護学校が多い中で、荘内看護専門学校はとても恵まれた環境にあることなどです。そして当院とのさらなる連携の重要性を強調しています。最後に伊藤淑子看護部長は、実習病院としての当院の使命について述べています。当院は実習病院としての誇りを胸に、看護専門学校と今まで以上に連携し、学生・職員・地域が学び合い高め合う文化を創造していく決意が表明されています。

一方、原著・研究・症例報告では、症例報告3題を含め計9題の投稿論文です。昨年（35巻）より3題多く、いずれも深く考察された良い仕上がりとなっています。職種別では、医師から7題（うち臨床研修医1題）、看護師から2題です。日々忙しい勤務の合間をぬって投稿していただいた皆さんの奮闘努力に感謝申し上げます。その中でも、今回は院外からも多くの寄稿がありました。いとうクリニック小児科の伊藤末志先生（現荘内病院顧問）や元当院小児科の石川純大先生（現新潟大学医歯学総合病院小児科）、元当院脳神経外科の五十嵐晃平先生（現山形大学脳神経外科）には、当院を退職されてからの論文作成には多くの障壁、難題があったかと想像しますが、見事それを乗り越えご投稿いただいた熱情にあらためて敬意を表します。

自分の考えを論文にまとめることは、自らの診療に対して他者から評価をいただける、またとない機会となることは以前から申しあげてまいりました。今まで本誌に投稿されることがない職員の皆さんには、来年こそはこの「鶴岡市立荘内病院医学雑誌」に勇気を出して投稿されることを期待します。自らの診療に対する今までの見方、考え方が大きく変わるきっかけとなり、ひいては自身の成長を体感できるまたとない機会になるはずです。

最後に、本誌を企画、編集された編集委員長の神経内科の丸谷宏先生はじめ、編集委員の皆さまに深く感謝申し上げます。

I. 病院憲章

高度・良質な医療と心のこもった患者サービスで地域医療を担う基幹病院

II. 基本理念

1. 診療圏域住民の生命と健康を守り、高度かつ良質な医療を提供し、地域医療機関との機能連携を強化しながら、基幹病院として地域医療の充実に努める。
2. プライバシーの尊重とアメニティの向上に配慮し、患者が安心と満足が得られる、快適な療養環境の整備に努める。
3. 医師や看護師をはじめ、病院で働く職員が一致協力し、心のこもった患者サービスの向上に努める。
4. 医療従事者の教育と臨床研修を重視し、市民から信頼され、地域医療に貢献できる、質の高い医療人の育成に努める。
5. 医療環境の変化に対応できる経営方針を確立し、安定した経営の基盤づくりに努める。



病院全景

目 次

巻頭の言葉

院 長 鈴 木 聡

病院憲章・理念

特集 地域から始まる看護の未来－荘内看護専門学校と当院の連携で生まれる次世代の育成 …… 3

荘内看護専門学校の「今まで」と「これから」と

鶴岡市立荘内看護専門学校 校長、鶴岡市立荘内病院 院長 鈴木 聡

受け継ぐ看護の心－新しい学びの場から－

鶴岡市立荘内看護専門学校 副校長 五十嵐 慶

地域医療を支える人財をとともに育てる実習病院としての使命

－荘内看護専門学校新校舎完成に寄せて－

鶴岡市立荘内病院 副院長兼看護部長 伊藤 淑子

原著・研究・症例

当院における過去44年間（1981年～2024年）の細菌性胃腸炎の変遷 …… 17

荘内病院 顧問、いとうクリニック小児科 伊藤 末志

小児科 阿部 裕

中央検査科 中嶋 知子

当院における起立性調節障害（orthostatic dysregulation：OD）の後方視的検討 …… 31

荘内病院 小児科、新潟大学医歯学総合病院 小児科 石川 純大

小児科 齋藤 なか・新井 啓・篠原 健

佐藤 紘一・佐藤 聖子・阿部 裕

吉田 宏

プラスグレルによる進行性脳卒中予防効果の検討 …… 39

荘内病院 脳神経外科、山形大学医学部 脳神経外科 五十嵐 晃平・齊藤 諒三

脳神経外科 佐藤 和彦

神経内科 丸谷 宏・佐藤 和彦

山形大学医学部 脳神経外科 園田 順彦

当院における重症新生児仮死に対する低体温療法施行症例の臨床的検討 …… 47

小児科 谷 知行・齋藤 なか・阿部 裕

佐藤 紘一・佐藤 聖子・伊藤 沙貴子

小林 祐太郎・神保 瑞希・吉田 宏

心不全患者に対する呼吸困難評価と呼吸ケア実践に向けた取り組み …… 53

看護部 集中治療センター

小林 陸

離床センサー使用患者の転倒転落防止のための取り組み -離床センサーカンファレンスの導入を試みて-	57
看護部 5階西入院棟	富樫 識成・岡部 光珠・武石 麻衣
保存的加療後に手術を要した魚骨による腸管穿孔由来の腹腔内膿瘍の1例	65
外科	佐藤 克成・坂本 薫・東海林 莞央里 鈴木 友梨・伊賀 元朗・牛嶋 聡 堀田 真之介・岡部 康之・島田 哲也 大滝 雅博・鈴木 聡・八木 実
救命に成功したパラコート中毒の1例	69
臨床研修医	加藤 悦久
循環器科	長島 義宜・渡部 尚輝・石垣 大輔・佐藤 匡
Sister Mary Joseph's Noduleを契機に発見され、 腹腔鏡下生検にて診断に至った腹膜中皮腫の1例	75
産婦人科	佐々木 秀・矢野 亮・高柳 健史・五十嵐 裕一
山形大学医学部附属病院 腫瘍内科	高橋 鴻志・福井 忠久
2024年 学術活動業績	
I 他誌掲載論文	87
II 学会発表	89
III 院外講演	93
IV 院内各種研修会	96
V 診療科別および部門別の臨床統計	112
VI がん登録現況報告	163
VII 人間ドック・検診検討委員会報告	167
VIII 死亡症例検討会	168
2023年 病理剖検記録要約	169

荘内病院医学雑誌第36巻は当院ホームページより全文をご覧いただけます。

URL www.shonai-hos.jp

特 集

36巻 特 集 目 次

特集 地域から始まる看護の未来－荘内看護専門学校と当院の連携で生まれる次世代の育成 …………… 3

荘内看護専門学校の「今まで」と「これから」と

鶴岡市立荘内看護専門学校 校長、鶴岡市立荘内病院 院長 鈴木 聡

受け継ぐ看護の心－新しい学びの場から－

鶴岡市立荘内看護専門学校 副校長 五十嵐 慶

地域医療を支える人財をともに育てる実習病院としての使命

－荘内看護専門学校新校舎完成に寄せて－

鶴岡市立荘内病院 副院長兼看護部長 伊藤 淑子

特集 地域から始まる看護の未来－荘内看護専門学校と当院の連携で生まれる次世代の育成

荘内看護専門学校の「今まで」と「これから」と

鶴岡市立荘内看護専門学校 校長

鈴木 聡
(鶴岡市立荘内病院 院長)

はじめに

荘内看護専門学校は、令和7年の今年、昭和25年に設立された前身の「荘内病院高等看護学院」から数えて75年目を迎えた。そして、待望の新学校が開校した記念すべき年を迎えることができた。これまでの当校の歩みを振り返るとともに、これからの当校の在り方を考えてみたい。

1. 学校の沿革

荘内看護専門学校は、市立荘内病院と歩みをともにして今日まで至っている。荘内病院の創立は、大正2年(1913年)6月であるが、翌年4月には院内に看護婦教習所が設けられている。

太平洋戦争が昭和20年に終わると、戦後の激動のもとで諸改革が次々に行われ、医療や看護の領域でも大きな影響を受けた。荘内病院は昭和22年に新潟大学系列の総合病院として再出発し、一方看護婦養成制度が保健婦助産婦看護婦法の制定によって、看護婦と准看護婦に区別されるなど全面的な制度の改革整備が行われた。それに伴い鶴岡市は新しく「看護婦」養成学校を設立することとし、昭和25年3月に誕生したのが本校の前身で、設立当初に甲種看護婦養成所と称した「荘内病院高等看護学院」である。

従来わが国の学校制度は、学校教育法に定める小・中・高校、大学のほか、各種学校に分けられていた。各種学校には、看護・栄養・和洋裁・理容など多種多様なものがあつたが、この制度は昭和51年に改められ、各種学校のうち一定の教育水準と規模に達しているものを専修学校(専門学校)として区分されることになった。

本校はこの改正に基づいて昭和51(1976)年4月に認可を受け、ここに「鶴岡市立荘内看護専門学校」が誕生した。平成7年より一定の専門課程の修了者に対し社会的評価向上を図り生涯学習の振興に資することを目的に、専門士の称号を付与することが文部省の省令で決定された。平成8年度には当校も認可を受け、平成8年度卒業生より専門士の称号が授与されている。平成15(2003)年7月の荘内病院の新病院開院に伴い、平成16年1月に増改築された校舎が完成した。

そして、創立75年を迎えた令和7(2025)年4月に新校舎へ移転した。令和7年3月までに1,210名の卒業生を送り出している。

2. 基本計画に謳われた新学校の特徴

なぜ新看護専門学校を整備する必要があつたか。まずは、校舎の老朽化、狭隘化が進んでいたことが一番の要因である。旧校舎は当初荘内病院の別棟として建てられ、一部は築70年以上が経過し、その都度各所の修繕が必要となってきた。さらに、近年の医療や福祉を取り巻く社会情勢の変化への対応である。少

子高齢化の進展や疾病構造の変化、新型コロナウイルスの流行、医療技術の高度専門化など社会情勢は多種多様に変化しており、看護現場や看護職に対する市民の期待も大きくなっている。一方で少子化等の影響で当校もここ数年受験者数が減少し、入学定員の安定的な確保が大きな課題になっていた。時代の要請にこたえる看護人材をできるだけ多く医療の現場に輩出していくことが当校の責務であり、そのためには社会のニーズに即応した看護教育の現場の改革が必要であった。

令和3年2月から「荘内看護専門学校基本構想（案）」に対する本格的な検討が開始され、同年12月に整備基本計画書がまとめられた。そしていよいよ、令和5年9月から本体工事が開始となった。

新校舎は、旧荘内病院敷地内（鶴岡市馬場町）にあった平屋建ての旧校舎から旧鶴岡税務署跡地（泉町）へ移転し、構造は一部鉄骨の鉄筋コンクリート3階建てで延べ床面積2,679平方メートルとなった。旧校舎の2.5倍の広さとなった（図1）。

新学校の修業年限は3年間で、定員は1学年10人増の30人とした。鶴岡地区医師会立の鶴岡准看護学院は令和5年3月で閉校となったが、その理由は少子化による入学希望者の減少と講師の確保が困難となったためである。地域の看護師の成り手不足を解消するため新学校では定員を増やす必要があった。



図1 新校舎外観

ナースキャップをモチーフにした3階建ての校舎. 右奥が荘内病院



図2 シミュレーション室

実際の病室と同様な備えをして実践的に学習できる（図2）。また、自宅療養の環境を再現した地域・在宅看護実習室には一部畳敷きの部屋も備え、療養者宅に訪問したような感覚が味わえるよう配慮するなど、在宅の視点を重視した教育にも力を入れている。一方、教育の基本はデジタルの時代になっても、教員と学生とのこころの交流が大切であることに変わりはない。当校ではそのために以前から、学生一人ひとりの個性を重視するチューター制を取り入れながら、きめ細かな指導をモットーにしている。講堂は講演会や式典だけでなく、軽運動用の体育館としても使えるような広さと床面の耐久性が備わっている。今までのように他施設を利用して体育の授業を行うことも少なくなり、学生、

学校憲章では、「地域住民の輝くいのちと心身の健康を守り、その人らしく生きていくことを支える看護師を育成すること」を謳い、学生には3年間の学びにより、「豊かな感性と人間性で人に寄りそうことができる」人材になってもらうことを期待している。教育面では、時代の先端をゆく技術と手法を取り入れた環境整備を行った。オンライン授業や遠隔授業、さらにはシミュレーション教育環境など快適な学習環境を整備した。デジタル技術をふんだんに取り入

このような社会情勢の中で、当校は、新校舎の移転に合わせて入学者の定員を30人に増員した。そして、地域の看護人材を確保するため、学生募集方法の変更や卒業後の地元定着に向けた施策を展開しているので紹介する。推薦入試は、今までは鶴岡市と庄内町の高校生のみを対象にしていたが、令和6年度入学生からはその範囲を全県に広げ、さらに令和7年度からは隣県の高校まで拡大した。また、社会人としての就労経験2年以上が対象となる社会人入試選抜制度も新たに導入し、入学者の獲得につなげている。

2つ目の課題は、看護学校卒業後地元で就職する看護師を増やせるかということである。図5は卒業生の就職・進学状況を示す。このうち平成28年度から令和6年度までの過去9年間における荘内病院への就職者数に注目すると、就職率が最も高かったのが令和3年度卒業生の64.3%（14人中9人入職）であった一方、平成30年度は26.6%（4/15人）と最低だった。令和6年度も28.6%（4/14人）で低い就職率となった。その打開策として、地道な取り組みではあるが、教職員は、日頃から当地区の地域医療の実情や問題点について学生に繰り返し語り理解をえることや、荘内病院の実習の際には、病院職員は、病院が目指す医療・看護のすばらしさと魅力を親身に伝えることが必要である。その結果、多くの学生に地元庄内地域と荘内病院を好きになってもらうことで入職希望者増につなげたいと考えている。

* 推薦・一般試験の合計数を表示

*R2・3・5年度は二次募集実施

入学年度	H22	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R元	R 2	R 3	R4	R5	R6	R7
応募者数	33	76	42	57	60	43	39	38	36	34	33	36	37	26	32	58
受験者数	31	74	42	55	55	42	39	38	35	32	33	35	37	26	32	55
合格者数	23	21	23	28	35	25	26	25	24	25	22	20	28	25	24	43
入学者数	20	20	20	20	21	21	20	21	20	18	21	20	18	13	19	33

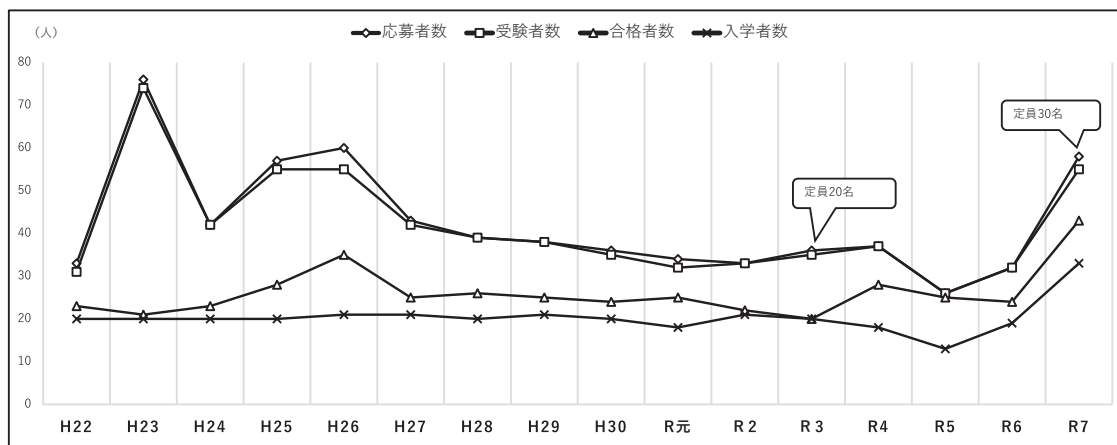


図4 入学状況

卒業年度	H22	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R元	R2	R3	R4	R5	R6
県内就職者数	11	16	16	16	11	14	11	17	13	16	13	12	11	14	9
県外就職者数	4	3	1	5	7	1	4	3	1	2	2	1	3	0	5
進学者数	3	1	0	1	2	1	3	1	1	3	2	1	5	1	0
卒業者数	18	20	17	22	20	16	18	21	15	21	17	14	19	15	14
荘内病院就職者数	7	13	10	12	6	8	7	7	4	6	7	9	7	7	4
荘内病院就職率(%)	38.8	65.0	58.8	54.5	30.0	50.0	38.8	33.3	26.6	28.5	41.2	64.3	36.8	46.7	28.6

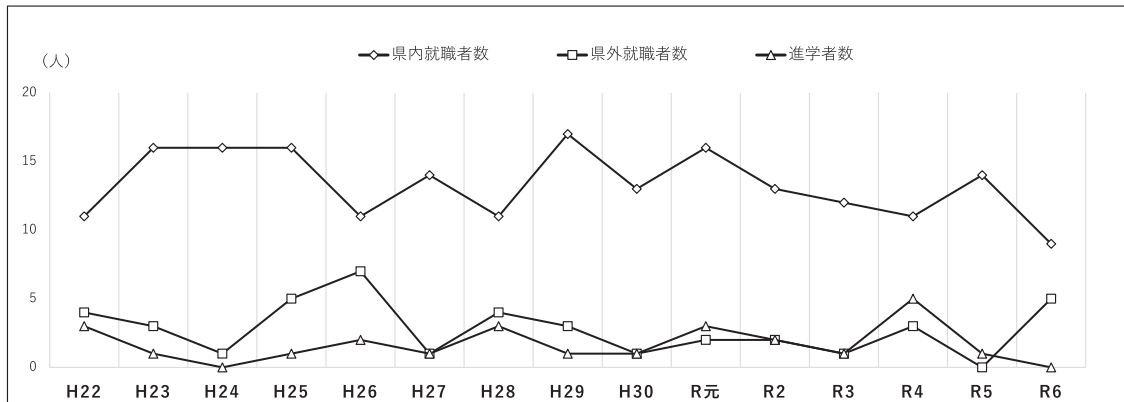


図5 就職・進学状況

5. おわりに

当校は学習環境が整った新校舎の強みを生かし、看護の道を志す若者に、今後も選ばれる学校であり続けられるよう努力していきたい。我々教職員は、学生やその保護者さらには市民の皆様にも、地元鶴岡でも質の良い看護教育が受けられると実感してもらえるような仕組み作りをめざしていくつもりである。そして、学生の確保と卒業生の県内定着、さらには荘内病院への入職者数の増加に向けて努力し続けるとともに、引き続き市民が安心して生活できる医療環境が整った街づくりに貢献していきたい。

参考文献

1. 看護師等学校養成所入学状況及び卒業生就業状況調査

(https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?stat_infid=000040221605)

特集 地域から始まる看護の未来－荘内看護専門学校と当院の連携で生まれる次世代の育成

受け継ぐ看護の心－新しい学びの場から

鶴岡市立荘内看護専門学校 副校長

五十嵐 慶

はじめに

このたび、多くの皆さまに支えていただき、創立75周年という節目の年に新校舎を開校することができました。長年の構想が形となり、この日を迎えられましたことを大変嬉しく思います。当校は創立以来、地域の医療を支える看護人材を育成することを大切な役割として歩んでまいりました。新校舎は、その思いをさらに確かなものにし、学生一人ひとりが充実した学びを深められる場として整えられています。ここでは、現在の教育を実現するために新校舎に込めた願いと、これからの歩みについて述べたいと思います。

1. 今行われている看護教育―第5次カリキュラム改正（令和4年度）

第5次カリキュラム改正は、少子高齢化による人口構造・疾病構造の変化、療養の場の多様化、さらには情報通信技術（ICT）の急速な発展と導入といった社会的背景を踏まえて実施されました。こうした背景から、看護職には、対象の多様性や複雑性に対応し、対象に応じた保健医療福祉を提供するための多職種連携などが求められています。また、改正の中では、地域の特性や学校の教育理念といったそれぞれの強みを生かし、特徴あるカリキュラムを構築することが示されました。

当校は「地域住民の輝くいのちと心身の健康を守り、その人らしく生きていくことを支える看護師を育成します」という学校憲章のもとに制定した教育理念・目的・目標に基づき、3年間のカリキュラムを設定しています。カリキュラムの一部を紹介すると、学校が所在する鶴岡市の地域住民の暮らしや思いを知る地域フィールドワーク、慶應義塾大学先端生命科学研究所の取り組みから市民の健康づくりとの関連を学ぶ学習、東北公益文科大学との多職種連携教育などがあります。実習では、多様化している人々の療養の場に即した看護の役割を学ぶこと、看護実践能力を習得することを目指し、鶴岡市立荘内病院を中心に市内及び庄内地域の多くの保健医療福祉施設で実施しています。

2. 現場で生きる力を育てる、実践重視の看護教育

看護専門学校は、将来の医療現場を支える看護師を育成するため、実践力を重視した教育を展開することが特徴といえます。当校では、これまでも学生が実践を重ねながら確かな看護技術を身につけることを、教育の重要な柱として取り組んできました。それを当校の強みとし、基礎知識に加えて看護技術やコミュニケーション能力を段階的に学べるよう、コロナ禍で期せずして運用が始まった遠隔授業に加え、新校舎の情報環境を活用した演習やシミュレーション教育の充実を進めています。そして、その教育的効果を検証しながら、教育の質的向上を目指しています。また、実習施設や臨地実習指導者の理解と支援により、臨床現場での看護技術の経験機会に恵まれていることも特長といえます。

そして、地域の保健医療福祉施設との連携により、幅広い領域で臨地実習を行えることも看護専門学校の強みといえます。実習においては、看護技術の習得だけでなく、自己の看護を振り返る「リフレクション(省察)」の時間を特に大切にしています。実習での体験を通して得た気づきや課題、患者さんとの関わりで感じた思いを言語化し、教員や学生間で共有します。このプロセスを通して、自らの看護実践を客観的に見つけ、次の行動へとつなげるための重要な学びの機会にしています。リフレクションを習慣づけることは、人として成長する力にもつながるととらえ、これも教育の柱のひとつとしています。

また、専門的知識や技術を身につけるだけでなく、学生の人間的成長を重視しています。令和6年度入学生まで定員20人という全国でも類を見ない少人数校であったため、学生一人ひとりに寄り添ったきめ細かな教育を大切にしてきました。新校舎建設に合わせ、令和7年度から定員が30人となりましたが、今後もその姿勢を大切に、講義や実習での教育的支援に加えて、チューター制による学生相談などを通し、学生一人ひとりの成長をしっかりと支えていきたいと考えています。

3. 目指す看護教育を支える新校舎の学習環境

当校の建設地は、平成14年より「鶴岡文化芸術交流シビックコア地区」に指定され、市立荘内病院、総合保健福祉センターにこゝふる、鶴岡第2地方合同庁舎など、都市機能の集積を図ってきたエリアであり、山形県立致道館中・高等学校が開校するなど、学術文化の拠点として期待される場所です。将来にわたり学生を確保していくために、魅力的な施設であることも重要な要素となるとされ、保健師助産師看護師学校養成所指定規則に準拠した施設設備方針に基づいて設計されました。

新校舎は3階建てであり、1階に管理ゾーン(管理諸室等)、2階に教室ゾーン(学生が多くの時間を過ごす教室等)、3階に実習室ゾーン(各看護実習室等)を配置し、使いやすい構成にしています。設計にあたっては、「①ベッド数を増やし、いつでも看護技術の練習ができる、各看護学専用の実習室を備えるなど実習室の充実を図りたい。②看護実践力を養うための、シミュレーション教育ができる設備をつくりたい。③学生がのびのびとゆったり過ごせるスペースを確保したい。④学生が主体的に学べる環境をつくりたい。⑤地域に根差した学校でありたい。」という学生や教職員の希望を叶えることができました。

特徴的な諸室を紹介すると、看護実習室は、ベッド10台を配置し、いつでも看護技術の練習ができるようにしました。また、母性・小児看護、地域在宅看護の専用実習室を備え、シームレスに利用できる配置となっています。シミュレーションルームは、看護実践力を養うために病院の療養環境を再現しており、セミナー室が隣接していることで、体験後の評価と振り返り学習が効果的に実施できます。コミュニケーションスペースは、学年を超えての交流など、のびのびとゆったり過ごせる場となっています。セミナー室や図書室は、学生が主体性をもって学べる環境になりました。



ベッド10台を配置した看護実習室



コミュニケーションスペース

4. 当校の課題—地域の看護人材となる学生の確保と育成

少子化の影響により、地方にある看護専門学校では定員を下回る状況が加速度的に進んでいます。また、18歳人口の減少に加え、高校生や保護者の間では「大学進学」が強く支持されているため、専門学校は進路の選択肢としてその魅力が伝わりにくいという課題を抱えています。

当校においても、ここ数年受験者数が減少し、入学定員の確保が課題となっていました。鶴岡市の将来的な看護師需給の推移等を検討した結果、新校舎移転に伴い、令和7年度入学生から定員を20名から30名に増員しました。一方、入学者の多くを占める本市の高校生人口を示す鶴岡市の出生数は、2000年（平成12年）の1,287人から2023年（令和5年）の627人と23年間で48.7%減少しており、5年後には現在より約100人減少すると見込まれています。校舎や教育設備は整えられ、ハード面の課題は解決されたと考えられます。今後は、看護師を目指す若者がこの地域で学ぶ意義を見出せるような魅力ある教育プログラムを、地域の多様な施設と連携して一層充実させていくことが、重要な課題であると認識しています。



セミナー室でのグループワーク



地域・在宅実習室

5. 鶴岡市立荘内病院との連携

新校舎は鶴岡市立荘内病院に隣接し、学校と実習施設が極めて近くにあるという好条件での学びが可能となりました。また、約90人の荘内病院の医療従事者による講義や、100人超の臨地実習指導者により丁寧な指導をいただくことで、学生一人ひとりの能力や個性に応じた教育の実現につながっています。地方にある看護専門学校が講師や実習施設の確保に苦慮している状況を考えれば、非常に恵まれた環境であると感じます。当校のはじまりが開院当初の荘内病院の看護師養成を担うものであったという歴史をふまえ、これからも歩みを共にし、地域の看護人材の育成のためにご支援いただけることを願っています。

地方にある看護専門学校は地域密着型が特徴といわれており、地域の医療ニーズに応える地元出身の看護師を育成するための重要な役割を担っています。また地域の医療機関と密接に関係しており、学校で看護師を育て、卒業後その地域で働くというケースが多い傾向にあると言われていています。当校も多分にもれず、学生の約8～9割は鶴岡市出身で、過去5年間の卒業生の約4割は荘内病院に、約7割が庄内地域の医療機関に就職しています。今後は、本市で看護教育を受けた学生が、市内の病院で臨床実践能力をさらに高めるといった独自の継続教育の仕組みを構築することで、この地域で働く看護師としての将来ビジョンを描くことにもつながると考えられます。新校舎は、そのような取り組みにも貢献できる場となるのではないかと考えています。

地域に根ざした学びの中で、学生たちは看護の専門職としての成長はもちろん、他者を思いやる豊かな人間性を育てていきます。当校はこれからも、地域医療を担う看護人材の育成に貢献するため、看護の未来を築く場としての役割を果たしていきたいと思えます。

特集 地域から始まる看護の未来－荘内看護専門学校と当院の連携で生まれる次世代の育成

地域医療を支える人財をともに育てる実習病院としての使命 －荘内看護専門学校新校舎完成に寄せて－

鶴岡市立荘内病院 副院長兼看護部長

伊藤 淑子

荘内看護専門学校の新校舎完成を、心よりお祝い申し上げます。新しい学びの場の誕生は地域の看護教育における大きな節目であり、未来の医療を担う若者たちにとって、新たな希望の出発点です。地域の中核病院として、長年にわたり看護教育を支えてきた当院にとっても大きな意義を持つ出来事であり、実習病院としての使命と責任をあらためて胸に刻む機会となりました。

1. 実習病院としての歩み

当院は、これまでも荘内看護専門学校の実習病院として、多くの看護学生を育ててまいりました。臨地実習は、看護基礎教育の核となる学びの場であり、学生は患者さんとの関わりや医療チームの一員としての体験を通して、看護の本質に向き合います。

私たち実習病院の使命は、単に実習の場を提供することだけではありません。学生が安心して挑戦し、失敗からも学べる環境を整えること、そして看護の魅力と責任の重さを体感できる学びの場を創造することが責務と考えております。実習を支える看護師は、日々の看護実践の中で「教える力」「見守る力」「導く力」を発揮しています。患者さんの尊厳を守りながら学生に学びの機会を提供するという責任は、簡単なことではありません。しかし、そこにこそ“次世代の看護人財を育てる誇り”があり、地域医療を支える使命感があると考えます。

2. 新校舎がもたらす学びの進化

新校舎には、最新のシミュレーション教育機器の導入、在宅療養に必要な生活の視点を養う地域・在宅実習室が整備され、学生が主体的に学べる環境が整いました。こうした教育環境の整備は、臨地実習に臨む学生の準備性を高め、より実践的な学びへとつながっていくと期待できます。これまで、臨床現場では「まず現場で経験しながら覚える」という側面が強くありました。しかし今、看護教育は大きく転換しています。看護基礎教育の段階で安全・倫理・科学的思考を徹底して学び、臨床現場では「実践を通して考え、振り返る」学びへと深化しています。

荘内病院看護部はこの変化に対応すべく、実習指導者の更なる育成と、看護基礎教育から繋がる看護継続教育にも力を注いでいます。臨地実習指導委員会の役割強化を行い、学生一人ひとりの学びを見守り、寄り添い、成長を共に喜べる教育文化を育てていくことを目標にしています。荘内看護専門学校教員との連携を強化し、学生が安心して挑戦できる環境づくりが、実習病院の重要な役割であり、看護の未来を支える礎と考えています。

今年度の看護継続教育の変革として実践したことは、クリティカルケアの特定認定看護師が講師を務め

ている新人看護職員のラダー研修（フィジカルアセスメント）を、新しく整備された荘内看護専門学校の最新シミュレーション教育機器を使用し、テスト実施したことです。加えて、この新人看護職員の研修は近隣地域のご施設の新人看護師も参加できる体制を整えております。今年度も複数人の参加をいただきました。今後も地域の看護人財の教育に貢献できる環境を提供していきます。



「新人看護職員ラダー研修 クリティカル分野～フィジカルアセスメント～」 荘内看護専門学校新校舎にて実施

看護基礎教育と看護継続教育が密に繋がることは、看護学生にも良い影響をもたらすと考えます。卒業後の先輩看護師の学ぶ姿を間近で見るとは、キャリアモデルをイメージできる環境作りにもつながります。また、新人看護職員においては、最新の機器を使用した研修や日常の現場を離れ学ぶ環境が、高い学習効果につながることを期待しています。今後も、看護専門学校と連携を取りながら教育環境を整えていきたいと思っております。

3. 共に学び、共に育つ文化

実習病院とは、学生に教えるだけの病院ではありません。学生と共に学び、共に成長する病院と考えています。学生の新しい視点や気づきが、看護師への刺激となり職員の学びも促します。実習指導を通じて、看護師が初心に立ち返り「なぜこのケアを行うのか」「患者さんにとって最善とは何か」を考え直す瞬間が生まれ、その積み重ねが看護の質を高め組織としての成長を支えるという相乗効果を生みます。

荘内病院看護部は、教育を軸に「学び続ける文化」を育てています。教育を通じて職員が後輩を育て、チームを導く力を磨いていく、この“教育の循環”が、私たちが目指す実習病院の姿です。



4. 地域とともに人を育てる

南庄内の医療を支える当院は、地域全体を視野に入れた看護の実践をめざしています。超高齢化社会を迎える中で、急性期から在宅・介護まで切れ目なく支援できる看護師を育成することが地域医療の持続可能性に関与します。

荘内看護専門学校との教育と、荘内病院での臨地実習が連動することにより、学生は「地域で生きる人を支える看護」を体系的に学ぶことができます。病院での急性期ケアから在宅支援まで、看護が果たす役割を広く理解し、将来の地域医療の担い手として成長していく姿を支えることが実習病院の責務です。

また、卒業後も研修や研修会、研究活動を通して継続的に成長を支援する「学び続ける仕組み」、いわゆる「看護継続教育」をブラッシュアップしていくことも重要と考えます。

学校との連携を一層強化し、卒業生が地域で学び続け、活躍し続けられるような教育ネットワークの構築を進めていきたいと思えます。

5. 実習病院としての誇りと未来

学生数が増加し、今後も実習病院としての使命を果たし学生の教育的支援を行うことは、現場にとっても大きな挑戦です。しかし、学生が患者さんに真剣に向き合い、成長していく姿を見ることは何にも代えがたい喜びです。学生が実習を終え「患者さんの言葉が忘れられません」と語る瞬間——そこに、教育に関わった者への存在意義が凝縮されています。看護は、人と人が向き合う仕事です。その原点を次の世代に手渡していくことこそ、実習病院に課せられた使命と考えます。

新しい校舎は、単なる建物の刷新ではなく、地域全体で看護人財を育てる新たな象徴です。私たち鶴岡市立荘内病院にとっても新たな挑戦の始まりです。これからも実習病院としての誇りを胸に、荘内看護専門学校と連携し、学生・職員・地域が学び合い高め合う文化を創り続けて参ります。そして地域医療の中核病院として、「人を育て、地域を支える病院」として歩みを進めて参ります。

最後に、看護師を目指す学生へのエールを贈ります。

「看護の道を志す皆さん、日々の学びの中で戸惑いや不安もあることでしょう。実習は患者さんの、いのちに寄り添う、看護の原点に触れる大切な時間です。失敗を恐れず、感じた一つ一つのことを大切に積み重ねていってください。私たちは未来の仲間である皆さんを応援しています。」

